

伊波普猷『琉球戯曲集』のローマ字表記

西岡 敏

(沖縄国際大学教授)

伊波普猷『琉球戯曲集』(1929年、春陽堂)は、組踊の台本テキストとして、これまで最も重要な書物の一つといっていよう。沖縄戦で散逸した写本を底本とした活字本であることも貴重であるが、台詞や歌の逐一にローマ字表記の「読み」を視覚的にも分かりやすく記しているところは、言語学を修めた伊波の、まさに真骨頂が発揮されている部分でもある。「視覚的な分かりやすさ」とは、テキストの上部に写本の翻刻(活字)を琉球定型の音数律(8・8・8・6)に合わせる句形で載せ、その下部に「読み」としてローマ字表記を配している。そのテキスト自体が、国文学と言語学の知識が有機的に融合した見事な体をなしている(さらには名優たちの写真や山内盛彬による五線譜もある)。おかげで、琉球古典の組踊が沖縄語(ウチナーグチ)として、どのように読まれるべきかを現代の我々に端的に教えるものとなっている。

伊波が「組踊」の「読み」に使用しているローマ字表記は、ヘボン式ローマ字表記に準じているので、日本語でローマ字を学んだことがある者ならば、容易に理解することができるだろう。ただし、沖縄語独特の発音である声門閉鎖音(グロタル・ストップ)が、アポストロフィー[']で表記されていることや、[shi](シ)と[si](スイ)、[ji](ジ)と[zi](ズイ)、[chi](チ)と[tsi](ツイ)などが違う音として区別されて表記されていることには注意を向けなければならない。後者の区別は、現代の「口語」の沖縄語では既に失われているが、組踊の発音、すなわち、「文語」の沖縄語では、異なる音として認識されている。『沖縄語辞典』(1963年)によれば、明治時代の「貴族・士族の男子」の話す首里方言には、このような発音の

区別が残っていて、「和文・漢文などの学習と年長者による厳しいことばづかいのしつけによって」(39頁)発音できるようになるとされている。「組踊」の「唱え」も、そうした「貴族・士族の男子」の発音を元として出来上がっていると、ひとまず言うことができるだろう。

こうした発音の区別のなかで一つ問題となるのが、伊波が[nyɪ]と書くものと[ni]と書くものの区別である。つまり、伊波は、二つの異なる発音の「ニ」があったと言うのである。この区別は「貴族・士族の男子」の首里方言でも見られない(『沖縄語辞典』52頁)。ところが、この[nyɪ]と[ni]の区別は、奄美諸島の方言などでしばしば見出されるので、無下に否定できない。現在、演じられている組踊の「唱え」では、「ニ」の発音は一つであるように思われるが、伊波の表記するとおりに発音すべきとなれば、奄美方言を参考にするなどして、[nyɪ]と[ni]の区別を習得する必要が出てくる。この区別は、明治時代以前の首里方言の発音を反映しているのかもしれない。

現在、琉球諸語は、「消滅の危機に瀕する言語」、いわゆる「危機言語」としてユネスコに指定されている。しかし、その危機は今日に意識されたことではない。『琉球戯曲集』(1929年)の後書きの中で、伊波は既に「幾世代の間、伝承によって学び得た吾等の琉球語は、既にその『言霊』を失った。言語学者は、南島に於いて言語破産の適例を見ることが出来よう」(45頁)と言っている。「言語破産」とまで言い、琉球語の将来にきわめて悲観的な見解を示した伊波が、ローマ字表記を含む『琉球戯曲集』という、緻密でモダンな組踊のテキストを世に送り出したことの意味を改めて考えなければならない。

「慈眼寺に詣し詞」

小 嶋 洋 輔

(名桜大学国際学群教授)

令和4年3月23日、波照間永吉先生、照屋理先生、小番達先生、屋良健一郎先生とともに補陀山慈眼寺跡を訪ねた。

和文学班として毛起竜(識名盛命)による「思出草」を調査するなかで、われわれは常々、実地に赴いて調査する必要を感じていた。盛命が見た風景は実際どのようなものであったか。その空気や匂いがわからないと安易に注を付すことはできない。そう思い、この調査出張の企画をメンバーで考え——照屋先生が中心であることを付しておく。私は何もしていない——てから、コロナ禍により身動きが取れない日々が続いた。そして今回、ようやく調査出張を行うことができた。調査は3月22日の朝8時の便で鹿児島に向かい、24日の夜8時の便で帰沖するというもので、丸三日、じっくり調査を行った。初日は「大隅の八幡宮霧島の御神に詣でし記行」で盛命が訪れた霧島神宮、安楽温泉、犬飼滝、鹿児島神宮と車を借りて見て回り、翌日の朝訪れたのが、補陀山慈眼寺跡である。

慈眼寺に盛命が訪れたのが康熙39(1700)年「葉月中の八日」。琉球館の東の浜から小舟に乗って訪れている。われわれが訪れたのが、旧暦でいうと如月の頃であり、しかも雨が本降りになっていたから、盛命が見た風景とは大分異なっているとは思われた。さらにいえば、鹿児島県はいわゆる廃仏毀釈がかなり激しく行われたということで——この薩摩の心性も近代研究者の私としては大変興味深いものであるが——、慈眼寺も苛烈なまでに破壊されている。盛命が苔みどりとした鳥居はなく、「阿吽の二尊けうとく立り」と書いた仁王像は二像とも腕がない。大きな巖の上にあったという大悲観音の御堂も今はなく、谷山護国神社の北方200mの位置にあった稲荷神社が、廃仏毀釈のあと移設されていた。

しかし、今回訪れることができて良かった。というのも盛命のこの「慈眼寺に詣し詞」でイメージし難かったのが、「巖」であり、「苔」であり、「滝の糸」であったからである。その風景を盛命は以下のように記している。私の拙く、まだ「案」にもならない翻刻であるが引用しておく。

滝の水上、松、杉、楓など茂りたる。あなたの岩根をつたひたどり行て 山復山、水復水、何の工みがけづりなし、誰成家に染なすなど、目もあやなるに、木くらき谷かげより、よきながれあまたにわかれて、色々の珠をまきたるか、見るばかりなり。

Googlemapなどを活用して、Web上でその場所を画像で確認することはできる。だが、いわゆる現在公園になっている、その一角にこのような場所があるとは思えなかった。慈眼寺跡は公園の中でも線路に近い場所にある。実際に訪れてみて、この場所が盛命の記述通りであること——幾分誇張気味のところもあるが、旅行者の興奮からくるもので、誤差の範囲といえよう——に驚いた。雨のため水量はかなり激しくなっていたが、滝は確かに存在し、巨岩の重なりもまた存在した。そしてその巖や岩橋は苔むしていた。琉球にはない風景に盛命がどれほど感動したか、それを理解することができた。まさしくこの場所は山紫水明——的確な表現とは思えないが他に思いつかない——的な風景のミニチュアとも呼べる場所であり、観光地だったのである。

今後も、こうした現地調査を行うことができればと思う。このような紀行文では作者の眼により添うことが重要なのだと再認した。そして一歩一歩、着実に注を付すことができれば——私などはそのお手伝いのお手伝いだが——とも思う。

2021（令和3）年度 下半期業務報告

（10月～3月）

「琉球文学大系」編集刊行事業の出版に係る産学連携長期プロジェクト事業調印締結なる！

事業開始から2年半を経て、この度標記調印式が行われました。去る10月7日（木）には原契約に先立ち、東京のゆまに書房内において「覚書」が締結され、関係者間で沖縄泡盛古酒（10年モノ）を献杯し、全35巻完遂に向けて産学連携協働関係を確認しました。11月26日（金）には、ゆまに書房関係者をお招きし、名桜大学内において全35巻出版に係る産学連携長期プロジェクト事業の調印式が行われ、併せて記者会見も執り行われました。



調印式後、記者会見の様子＝11/26、名桜大学本部棟4階

令和3年度第2回「琉球文学大系」全体会議（編集・執筆者会議）を開催

12月17日（金）、浦添市産業支援センター・結の街にて令和3年度第2回「琉球文学大系」全体会議が開催されました。波照間委員長より現在、鋭意取り組まれている第1巻『おもろさうし 上』の進捗状況が報告され、協議の中心は出席した各委員からの担当巻進捗状況報告等の情報共有が行われ、質疑応答も活発に行われました。



全体会議の様子＝12/17、浦添市産業支援センター3階

第1巻『おもろさうし 上』最終追いこみ作業により校了（2022.2/13～2/28）

瑞木書房の小林基裕氏が来沖し、那覇市内のコンドミニアムにて波照間委員長らと15日間の合宿が行われました。波照間委員長はコロナ禍による後遺症を抱えながら全体の作業を統括し、最後の4日間は南風原町の沖縄高速印刷(株)に詰めて6名（波照間、照屋、小林、渡具知、石川、比嘉）が缶づめ状態で最終確認を行い、2月28日（月）校了をもって業務をゆまに書房へ引き継ぎました。

公立大学協会への相談開始

令和4年3月25日（金）に、名桜大学で重点事業として継続している「琉球文学大系」編集刊行事業について、研究大学としての位置づけで地域創生事業として外部資金申請の可能性について中田晃事務局長を訪ね、第1回目の相談として公立大学協会訪問（砂川学長、波照間委員長など計4名）を行いました。

「琉球文学大系」第1巻発刊記者会見

3月31日（木）午後2時から学内編集刊行委員会が開催され、午後3時半より学内本部棟において記者会見が行われました。2019年（令和元年）4月に編集刊行事業が開始され、3年目の令和3年度内に記念すべき第1巻を発刊することができました。記者会見の席には砂川昌範学長、山里勝己名誉委員長、波照間永吉委員長が会見を開き、同書のお披露目が行われました。



記者会見で挨拶をする砂川昌範学長＝3/31

北琉球のうた探訪—解釈と鑑賞 (5)

あおりやへがふし (オモロ巻5-234)

一 首里もり、ぐすく
しまこがね、ぐすく、
ともゝすゑ、
とひやくさす、ち、よわれ
又 まだまもり、ぐすく、
くにこがね、ぐすく

【訳】^{シヨリ}首里杜グスクは
島の立派なグスクだ
(国王様は) 千年の末までも
千歳の長寿にこそましませ
真玉杜グスクは
国の立派なグスクだ



— [詞章は『定本おもろさうし』(2002年)より。訳筆者]

上記の歌は、琉球最古の儀礼歌謡集『おもろさうし』(全22巻、1554首。以下オモロ)に収められている内の一つ。本歌の大意は、首里杜グスク・真玉杜グスクは、島・国の中で最も美しく立派なグスクだ。国王様は千年の末・千歳までも長寿でいらっしゃいませ、というもの。首里杜・真玉杜グスクとは、今でいう首里城のこと。それを「島黄金・国黄金」と讃えたところにこの歌の良さがある。オモロには、各地に点在するグスクがうたわれているが、「島黄金・国黄金」と美称したグスクはこの首里杜グスクのみ。他のグスクとは、明らかに格の異なるグスクである。

そのことは、グスクの築城を詠んだオモロからも窺える。例えば、各地のグスクを詠んだオモロでは、アマミキヨ神(琉球神話の開闢神)が造ったグスクとうたわれることが多い。しかし、首里杜グスクを詠むオモロでは、抽象的な神の築城とはうたわず、琉球国王(「首里おわたでこ」「あんじおそい」等と出る)自ら思案して造ったグスク(217・478・1547等。※数字はオモロの通番)とうたう。明快である。それは、琉球全土を治める国王の権威の象徴として首里杜グスクを詠む必要があったからであろう。首里杜グスクを、別名「百浦襲い」(多くの村を支配するグスク。250)や「百浦引くぐすく」(多くの村を導くグスク。436)、「上下の世揃ふるぐすく」(北南全域の世を治めるグスク。218)などと、繰り返したうたうのもそのような事情からである。その他、オモロでは、首里杜グスクは「宝物を持ち満たすグスク」(217)、「果報を寄せるグスク」(355)、また「雲風が寄り添うグスク」(757)としても想念されていた。オモロに描かれる首里杜グスクの表象は、強大な力を誇示する国王の表象と重なっている。(石川恵吉)

2021年度 寄付者一覧

本年度は下記の個人より寄付をいただきました。厚くお礼申し上げます。

【個人】伊差川則子

(五十音順・敬称略)

2021年度 図書寄贈者一覧

本年度は下記の個人より貴重な図書資料の御恵贈がありました。厚くお礼申し上げます。

【個人】島 康貴(仲原善忠『琉球の歴史 上』) 波照間永吉(沖縄エッセイストクラブ編『長虹堤』 他26冊)

(五十音順・敬称略)

「琉球文学大系」新規関係委員の紹介

本事業の関係委員に、このほど前堂颯世氏(名桜大学非常勤講師)、李舒陵氏(沖縄県立芸術大学・琉球大学・沖縄国際大学非常勤講師)が新たに加わりました。前堂、李両氏は第26、27巻『琉球漢文学』(上・下)を担当します。

「琉球文学大系」関連記事目録—2021年10月～2022年3月

沖縄タイムス「名桜大とゆまに書房本作製／琉球文学継承～産学連携」(11月27日付)

琉球新報「琉球文学大系」全国へ／名桜大、ゆまに書房と連携／来年3月、第1巻刊行」(11月27日付)

各巻担当委員の皆様へ 令和4年度各巻執筆者による個別巻別会議開催のお知らせ

令和4年度全体会議の前倒し開催(4月下旬～5月上旬)については、本事務局より各委員の皆様にご緊急での日程調整をさせていただきましたが、残念ながら流会となりました。つきましては、その代替として標記のとおり本年度3巻、次年度4巻を優先順位として個別担当委員による巻別会議に切り替えて開催することと致します。新年度のご多忙の折、恐縮に存じますが何卒ご理解頂きますようお願い致します。